

教師から見るスクールカースト —これからの学校の姿—

HS22-0145B 竹内 麻子

1. 研究の意義

私たち日本人の多くが教育を受ける場として小学校、中学校、高校、専門学校、大学などの教育機関に所属し、そこで生活時間の相当部分を過ごしている。決められた学級集団の中で多くの生徒は自分の「立ち位置」「地位」を把握し、生徒同士でランク付けをしあうなど、学校という場には特有の「空気」が存在する。その「空気」の中で生徒たちの序列を決めグループを形成し、自分の地位に見合った行動をとることがかねてより多くの問題を引き起こしてきた。

このように、学級集団において形成される人間関係の序列化を「スクールカースト」という。この「スクールカースト」は、いじめや不登校の要因の一つとされている。

本稿では、この「スクールカースト」がどのような歴史的背景によって生まれ、今現在の学校で存在しているのか。また、教師の立場からみた「スクールカースト」を考察し、メリット・デメリットを明らかにし、現在の学級制度のありかたについて考察していく。

2. 先行研究

「スクールカースト」が生まれた要因として二つが考えられる。まず一つ目は、1990年代から文部科学省が導入した「個性化教育」である。これは、「生きる力」「考える力」「個性の重視」などの明確な基準がないものである。この個性化教育を取り入れた結果、子どもたちは自分の潜在的な可能性や適性を主体的に発見し、自分で自分の価値観を作り上げなくてはならなくなった。

二つ目の要因は「共同性」である。日本の学校は、従来から「共同性」ということを重要視した学級集団である。生徒たちは1日閉鎖的な空間(教室)で、さまざまな人と関わりあうことを強制的に強いられているのだ。そのため、それぞれのやり方を受け入れたり、やり過ぎしたり、耐えながら生活を送っている。その「共同性」に応えきれなくなったときに不登校や、いじめがおきる。

以上の様々な要因が重なった結果クラスに「スクールカースト」と呼ばれる生徒間の序列化が生まれた。

この「スクールカースト」とは、クラス内のステイタスを表す言葉である。ステイタスの決定要因として、人気やモテるか否かという点である。上位から一軍・二軍・三軍、A・B・Cとよばれる。(森田 2007)

また、この「スクールカースト」を決定する大きな要因は「コミュニケーション能力」とされている。この「コミュニケーション能力」とは、具体的に「自己主張能力」「共感力」「同調力」の三つの能力である。

さらに、この「スクールカースト」は単に高い低いということだけでなく、生徒個人に、役割としての「キャラ」を与える要素も持っている。

この「スクールカースト」の認識は生徒と教師では異なっている。生徒たちは「スクールカースト」を「権力」として捉えているのに対し教師たちは、「コミュニケーション能力」だと認識している。また、時にはこの「スクールカースト」上位の生徒を利用し、教師が望ましい方向性に生徒たちを導いてまとめていく戦略をとることがある。

3. インタビュー調査

今回のインタビュー調査では、現代の学校の実態を明らかに、実際に教師が「スクールカースト」を認識し、どのように学級運営に利用しているかを知るために、現役の中学校・高校の教師3名を対象にしてインタビューを行った。

インタビュー結果から教師3名が生徒の地位の差を把握していた。また、「スクールカースト」を決める要因として①成績②運動能力③コミュニケーション能力という先行研究で述べられた要因と一致した。また、それに加え今回の調査では、①地域性②所得③学校の校風が関連していることがわかった。

さらに、「自由な校風」を持つ学校や、生徒自身が自主的・主体的に行動している学校では、「スク

ールカースト」といわれる格差やいじめは少ないという。

また、「スクールカースト」上位にいる生徒を自ら行動できる生徒であると捉えていたり、実際に、上位の生徒を中心にクラス学級がうまくまわるように利用している教員もいた。

このようにインタビュー調査から「スクールカースト」という言葉の捉え方は様々だったが、クラス学級内で「スクールカースト」の存在があると3名全員が認識していた。この、「スクールカースト」の決定要因として、地域性、成績、運動能力、経済力などが挙げられた。また、「共同性」や「均一性」などにより、生徒が「スクールカースト」によって役割としてのキャラを押し付けてしまう面もあった。しかし、マイナス面だけではなく、実際に「スクールカースト」を利用しながら活動的な生徒を消極的な生徒を引っ張り上げる学級運営をし、クラスを作り上げていた。

しかし、この「スクールカースト」を使った学級運営を行うにあたって、「ある程度の学力をもつ学校」「自由な校風をもつ学校」「経験や知識の豊富なベテラン教師が担任である」という条件を満たしている学校に限り実現できるといえる。

4. これからの学校の姿

人が集まる場所には必ず「グループ」というものが出来上がる。「学校」という場所だけでなく、塾、職場、ママ友、親戚など多くの場が存在する。人が集う場所には人間関係の序列がうまれてしまうものであるのではないか。今までは、「スクールカースト」やいじめをなくすことを考え、学級制度の廃止やクラス担任の廃止という議論が行われてきた。しかし、「スクールカースト」を無くすのではなく、いかに「スクールカースト」を把握し、うまく使うことで生徒たちが過ごしやすい教室空間を作ることもできるのではないか。

今回のインタビューにあったように、教師は平日頃から生徒と向き合い生徒の良さ、性格を把握しながら教室空間をつくっていた。その中で教師たちは実際に試行錯誤しながら、「スクールカースト」という生徒同士の人間関係を把握しながら学級運営をし、クラス学級を作り上げているのだ。

単に、「スクールカースト」を利用するだけでなく、生徒の良さ、優れている点を学校でいかに発揮させることのできる空間づくりをできるかとい

うことも重要であるといえる。

勉強や運動は学校以外の施設で学ぶことができる。しかし、お互いを認め合うこと、行事等でクラスにおける協調性を養うことなど、学校では多くの力を養うチャンスのある場である。

教師が生徒の人間関係をしっかりと把握し、教師の決めた範囲内での自由な空間の中で生徒たちが主体となり、お互いの事を認め補完しあい、満足できる学校生活を送ることができる空間をつくり出すことも、新たな学校生活を作る一つの方法であるといえるだろう。

参考文献（一部抜粋）

- ・鈴木翔,2012,『教室内カースト』光文社新書
- ・土井隆義,2009,『キャラ化する/されるこどもたち——排除型社会における新たな人間像』岩波書店
- ・内藤朝雄,2009,『いじめの構造——なぜ人が怪物になるのか』講談社現代新書
- ・本田由紀,2011,『学校の「空気」——若者の気分』岩波書店
- ・森口朗,2007,『いじめの構造』新潮新書